

## 何でも語るコーナー

## 第7回:タネについて

## タネについて

05/4/10

今回のネタは、植物のタネ。タネのネタ、ネタのタネ...お一つと！ギャグではないよ。

植物と同じつながりで、タネにもはまっている。種を買ってきては、ビンに保存し、暗所に保管して、撒きたくなったら、ちょっとずつ撒いてます。

お弁当用の野菜...とりわけ、かぶ系と葉は種類豊富ですよ♪かぶで言えば、品種違いの小振りの大根とかラディッシュとか、かぶとか。葉で言えば、三つ葉、モロヘイヤとか。実でいえば、なすとか胡瓜とか。

花も大好きなのだが、個人的には、古くからあるような日本名がついた花は、名前を聞くと、精神的に日本の種だと思い込んでしまう癖があるようで、パンジーだって、桔梗と聴けば「ほー」になってしまうかもしれない。大げさな例だが、まだ植物名と姿形が繋がっていないからです。

で、草花図鑑とかみてると、だんだんと古くからの花とかもわかってくる。原産を調べると、アジア圏が多い。特に、日本付近の国に分布が限られていたら、かなり日本的な花だと思っちゃうんよ。

で、で、日本にある古くからの花って、やはり日本が島国だということを考えると、中国とか、古くからの交流のある国から、古くにもたらされた花が多い。中国が広大だから、気候も日本に適應できる部分はあったのだろう。それが、何千(百)年もかけて、日本の風土にとても馴染む。小笠原は、太平洋に面していて、しかも、太平洋側の国から異国の地のタネとかが運ばれる。独自の植物系が創生されたと、とある本に書いてあった。

木だけでなく、毎年生まれ変わる草花も、何年もその地域の風土に生き抜いてきたんですからね～日本にある古い草花も、木以上に激しい気候の移り変わりに対処できるように脱皮してきたわけです。100%脱皮できるといっても過言でないですからね。

とはいえ、さすがに今の悪環境には適應できず、古くかは別として、絶滅危惧種という存在になってしまうようなものまで出てきています。たった100年にも満たない人間の一方的な破壊工作で、植物の得てきた適應能力もろとも、種ごと消し去ってしまうかもしれない...消し去ってしまったものまで実際にある。だから、今世紀は地球に優しい人間になるという。もう、技術と環境の一方的な取捨を行うのはやめたほうがいいと思います。と、僕が言う前から、いろいろな場面で環境が叫ばれているのだが。

また、絶滅危惧が進むと、自生地以外で古くからの形質を保つのは難しくなってしまう。ただでさえ数が減ったうえに、自生地が減るのはすごく心が痛い。だって、自生地の環境に耐え抜いた、独自の形質がそれぞれの「姿」や、もっと言うと「形質」として現れているのだから。

汚い環境で耐え抜くための防御手段で生き残っても、姿は前と異なるだろう。自生し始めた原種から、それぞれの地域の気候の違いで花色まで変わってくるし、花の形や屈強さまで変わる。汚いからと、汚い花をつけるのかはわからないが、耐え抜ける強さがあるからこそ、姿を残しても生き残れるかもしれないし、耐えぬけなければ死んでしまうかもしれない。

でも、古くからの種が、繊細だとは思っている。四季が穏やかだったからだろう。また、中国を生き抜いてきた種とかも多いし、もともと、中国には穏やかな草花が多い。穏やかな気候も多いのだから。ところが、今の四季は強烈だ。特に、都心部。四季どころか、夏すら越せない、うだるような暑さが急激にやってきたわけだし。後は、酸化力の強い空気の成分。これも四季のうち、とみなせば強烈だ。

また、草花の中には野菜や果物まで有る。日本の花の育苗技術は進んでいるが、食料に関しては経済発展とともに、大量消費型の作物作りに身をゆだねがちだ。遺伝子組み換えはそれが外資企業の支配下に置かれる可能性も有る、危険な選択だ。日本に遺伝子技術があるなら、当然、海外にも遺伝子組み換え技術は有る。

日本は当たりし物好き…この言葉は、最近の良い印象をもてない。遺伝子にしても然り、古くは、島国ということもあり、伝承と吸収を融合して、独自の文化に発展させてきたのだが、今は伝統をないがしろにしすぎだと思う。先祖様が作り上げてきた食文化までが、壊されそうになっている。壊されそうだというのは、大幅に壊れてきたらもう、伝統を伝統として残すのが困難になるのでは、という意味だ。その端的な例が、遺伝子組み換え作物やF1種子といった、工学的な匂いのする技術だ。

遺伝子組み換えは、ただ否定したって何も始まらない。だって、農薬漬けのお米だって、きちんとお米の形がしているし、農家の人が大変な手間をかけて作ってくださった、ありがたい食物であることに変わりはない。有機米なら何も文句はないかといったって、文句は言いたい。みんなが食べられるわけではないんだから。遺伝子組み換えの前にも、さまざまな批判の有る技術があったわけだ。それを知らない人も、知ってる人も、みんな、遺伝子は怖がる。

(90年をはじめ、小学生の僕は、当時、バイテクといっても、山崎パン工場を目の前にしているような、普遍的で変化の無いもののようにしか思えなかったが、当時遺伝子組み換えのことまで知っていたって、今のような恐怖感を抱かなかっただろう。)…OIDUSの思い出。

かといって、食べるものを自給自作をするのは難しい。ちょっと数字を出してみた。毎日白米を食べるなら、量だってすごい。確か1合大体、15000粒くらいだったかと思う。白米は、穂には100粒くらいつくわけだから、365日毎食1合食べたら、17000000粒くらい。これを自給するには、この数字にあわせると12000穂くらい。30CMおきに穂がなっても、 $200\sqrt{3}\cdots 340 * 30\text{CM}$ で、1アールくらいの土地が必要だ。当然、農家はヘクタール単位でお米を作ることが多い。自給なんて無理だ。

最近までの食文化は、食べる人と、人に分け与えられる人がいる図式だった。昔は、年貢は米だった。自給自足する農家が多かった。農家はたくさんいて、自給自足もままならないような生活も強いられてきた。商人は作物を大量消費地とかに売りつけたり、作物を育てない地域に売りに行ったりした。

都では食文化が長い間大切に受け継がれ、それに伴い、大切に育てた固定主のタネが受け継がれ、おいしい食材、地域にあった食材が、タネの形で保存されてきた。

京野菜を、京都で見たことは無いが、イメージが専攻するのもかもしれないが、とにかく太陽の光を反射した野菜は、本ではとてもピカピカしている。絹のような光沢、まるで、光を放っているようだ。本物を朝市で見ればよかったが、惜しくも、京都の修学旅行のときは何にも感じないで、ただただおいしければ、おいしい食事なんだなあ、としか思わなかった。作り方も、手入れも、すごく丁寧だ。

ところがどうだろう。遺伝子技術が発展すること自体には文句は言わない。植物学、植物の分類や、先祖の系統を予測したりするには、とても重要だ。組み換えに関しては、

医療の分野での発展を願う人も多いと思う。

食べ物になるととたんに怖がる。毒物質でも放出されているような目をしてで、某トマトをにらみつける。某大豆もそうだ(そういう事件もあった。遺伝子組み換え食品で、死者だつて出たくらいだ。)。それは、食だけは我慢のできないことだからだろう。動物の宿命だ。食べ物を食べないと、必ず死ぬ。

それで、最初のきっかけは不明だが、いろんな事件とうわさが広まって、マスコミがあおつて、日本の法律が頑固だったから、遺伝子組み換えは悪者イメージがまとわりついたのである。日本に持ち込むと危険なのだ、と。もちろん、遺伝子組み換えが悪いなんて、悪いことがおきない限り誰にもわからない。こういう怖さだつてあると思う。薬だつてそうだし。臨床実験と違い、すぐに結果のわかるものではないんだから。

遺伝子組み換えが育苗家の顔もしからめさせる。「やりすぎではないか」みたいに。確かに、今はまだ無理だろうが、遺伝子から植物を作り変えることができるのだから、今できる技術…某青いバラみたいに、ありえないことだつてできてしまう。早い話、「神の領域」に触れてしまうことへの疑問だ。

タネの存在の意味は、「死ぬために生きる」子供へのプレゼントであり、宿題であると思う。生物は必ず死ぬ。だから、生きている間にできることをやる。植物は、生き残るために死ぬ。生き残るために、タネを作り、生きる知恵(適応力)を残し、自分は死んでしまう。死なないことだつてももちろんある。分裂できるんだから。形質をおおかた残し、繁殖できる。種を作つて枯れて、翌年にはまたきれいに花を咲かせる。

でも、種を残し、タネを遠くに運んで、新たな分布先に根付くには、やはり違う雰囲気の中でさらされながら、適応性を身につけ、それを残さなければいけない。そのための植物の知恵が、タネなのだ。竹は、たけのこでも増えるが、それは、たけのこから生える根が1本につながっているからだ。花が咲くのは50年単位。当然、タネができるのもそれに合わされる。こういう、タネに頼らない進化だつてあつたわけだ。タネはあくまで、種の反映の手段だ。

そして、古くからある、あるいは、気候にだいぶなれた固定種は多様性を保ちつつ、形質も保存している。こういう、固定種が、僕は大好きだ。その気候に耐えてきたわけで、その気候に思いを馳せたり、ちょっとずつ違う姿形を見ていても飽きない。さらに、他生物との共存もできているわけだ。本来の植物とは、生物と共存ができることが多かったのだ。

それが、人間のとてつもない力によって、それすらできなくなってしまう。日本人の失つたものは、想像以上だと思う。天然記念物に指定するだけで済む話ではない。絶える前に何とかすることが必要だ。絶えるというのは、絶滅ということではなく、環境が絶えてしまうことを言いたい。環境あつての適応性なのだから。

そして、その解決法が、種の保護とかではしょうがない。ある程度の変化に対し、もとの姿に戻せる地球の力同様、ある程度の変化に対して行う保護活動なわけで、おそらく、地球は、同じものを引き換えに出さなければ、元の地球には戻ってくれないだろう。つまり、均衡のバランスが崩れた分を地球に還元しなくてはならない。これは相当のものだ。経済に対しては犠牲になるだろう。開発そのものを抑えなくてはならないんだし。地球は均衡を守れば、共存のための住処として、生物にその体を与えてくれる。だが、誰も均衡を破つた動物はいない。人間しか、これほどのことはできない。

タネ一つでこれほどの記事を書くほど、今はいろんなことを考えたいわけです。そして、タネは工学には無い、「多様性」というものを持っている。当然、工学に多様性があつてはいけない。工学とは、安定した理論によって、同じ解が導き出されるのが美しい。毎回毎回解が異なる理論なんて、理論とは呼ばせない。結局は、もっと美しい答えを求めるわけ

だから。

そういう中でずっと生きてきた僕なわけだから、タネのもつ多様性というものには、とても感銘を受ける。とはいっても、頭がまだ工学のままとか、そういう一辺倒な自分ではないくない。交じり合えるのが、知識・知恵なのだ。何も、タネの生きる可能性を、組み合わせや数値で表したいとは思わない。誰もわからない将来の姿に向かい、ひたすら今を生き抜く。人間もそうなのだ。未来がわからないから、今をひたすら生きる。工学漬けの人間には、未来まで見えてしまうのではないか？皮肉を言いたい。というより、僕はこのまま生きてらきつとそうだったろう。というか、一昨年すでにそういう風になりかけていた。こんな僕を変えたのが、OIDUSの思い出とともに、運良く見かけた「夏子の酒」だったわけです。是非見よう！

生きる意味を考えてみても、やはり、今の自分は、後世に知恵を伝えるということしか頭に無い。そのために毎日楽しみながら生きている。いつか死ぬのがわかるわけだし、今は死ぬことを考えるよりも、生きることを考えている。若さとは、時間があることを言う。若い人は、やりたいことができる。ための時間がある。年齢が高くなると、心が若ければ若いとよく聴く。そのとおりだ。死ぬことを考えて怖がらないで、今を生きることを考える。時間というのは、生きるための時間なのだ。死ぬために準備された時間ではあるとはいえ、死ぬまでに何もやらない時間ではない。生きるために用意された時間だと感謝しよう！そして、いつか真っ当な人生を送れたと感じたい。そのときこそ、死ぬときだと思う。

遺伝子組み換えは、生物における、適応性すら奪いかねない。均衡も崩しかねない。植物の生きる意味を奪う可能性があるわけだ。だから、慎重に行うべきだ。日本が遺伝子組み換えの稲に手を伸ばしたのは、アメリカの背後に有る大企業の力が、あまりに強大だったためだろう。今回のがきっかけで、どんどん組み替えた植物が送り込まれる。だろう。政府はそれを考えているのか？

環境にやさしいというのは、環境との共存を理想とするべきだ。人間が操作すらできる上で均衡を優先する。植物のスペースを増やすとか、そういうことで果たして均衡は維持できるのか？超巨大ビルが増えるということは、今までの地域文化がなくなることを意味する。住みたい人が集まるのだから、前に済んでた土地は人が減る。そうすると、文化の大改革ということになる。それでは極端だ。だから、消費を減らす…1人1人の自覚と行動がないと、究極的には達成不可能な目標だと思う。消費や破壊を食い止めるためには、技術の向上と消費の低下が最重要だ。植林にしても、荒地を再生するとかならわかるが、人間が地球を作り変えるようなことをしては、結局生物にも影響がある。均衡を守りつつ、近郊の傾いたことだけは治していく…消費を減らし、破壊を減らし、技術向上と意識の持ち直し、100年前まで均衡を破ることすらできなかったのだ。どうして100年でこれだけおかしなことができたのだろうか。改めて、人間の数には驚く。頭の数がそれだけあるのだから。

できないより、できたほうがいいのは、僕の考えることだ。もちろん、いろんな人が同じ考えを持っているだろう。だから、文系理系と分けて何の意味がある？文型が理系のことをやると奇妙に見られ、理系が文型のことをやるとこれもまた奇妙に見られる。結局、それしかやらないままで終わってしまう、準備生みたいなのだろうか。諦めか、馬鹿なのか、時間が無いからという理由で、取捨選択をする。これほど悲しいことは無い。生物が生きていくことを考えると、人間に与えられた特殊な知恵というのは、2つに分けられてしまうことになる。衣食住とは違う。2つとも、生きるための蓄積なのに代わりは無い。分担しなくてもいいと思う。天才だけができることではない。いろんなことに取り組んでもみないうちは、そんなこと気にも留めないだろう。だって、研究者は研究が何より楽しい。それは僕も同じだ。でも、研究しかしたくないわけではない。趣味どうたらとかの枠組みは作りたくない。生きた結果が後世に伝われば、それでいいのだ。それに文系理系は関係ない。知恵というのは、誰でも使えるような理想的な知識だ。生きるための知識だ。深く広く生きる意味は、深く広い知恵を残すことにある。その過程が楽しいし、時間に縛られて特定のことにしかしないなんてつまらない。みんな「無理」という。時間が足りないという。でも、果たしてレオナ

ルドダヴィオンチが深く生きたといえるのだろうか？天才だから深いのか？違う。深く広く生きるというのは、終わりの無い挑戦をし続けて、いろんなことに取り組むことだ。1番の数で決まるのではない。ゴールなんて無い。死ぬまでやり続けられるのだから。だから、僕が広く深く生きていたいというのは、結局は、そう生きて生きたいという理由があるからであって、かんがえたら広く深くか広く浅くか、狭く浅くか、狭く深くの4種類しかないと考えて選んだ、もしかしたらずうずうしい生き方なのかもしれない。

#### 記事の作成者

この記事は、管理人のOIDUSが作成しました。

このページへのリンクはフリーです。転載も許可しています。転載の際は内容を変えないようお願いいたします。また、このページを利用して何かおきても、作成者のOIDUSは一切、責を負いません。自己責任でご利用くださいネ！（なんと無責任な・・・）

この記事に関する質問、苦情、要求などがございましたら・・・

[oiduscom@yahoo.co.jp](mailto:oiduscom@yahoo.co.jp)

宛てにメールをお寄せください。